
と・け・い

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

と・け・い

【Zコード】

Z7991F

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

時計たちの住む天上の島に、突然現れたパジャマ姿の娘。どこから来たかも自分が何者であるかも知らないこの娘に、親切な目覚まし時計が声をかけた。やがて二人は結婚する。だが、二人の生活は長くは続かなかつた。たつた三日で、新郎は自らの命を絶つたのだ……。

新婦は絶望にうちひしがれていた。あまりにも早すぎる新郎の自殺、一夜にして寡婦となつた若い娘。ああ、世界はすべからく無情とはいへ、こんなことがあつていいものだらうか？

新郎が自ら命を絶つた理由について、周囲の者にはようとして知れなかつた。新妻との不和？ だとしたら、なぜ新婦はあんなにも泣きはらしているのか。お互いの気持ちの行き違い？ だとしたら、もう少し様子を見てもよさそうなものだ。しかし夫婦を知るもので、新婦の涙の理由を疑うものなどいなかつた。この喪服 黒いパジヤマ を着た娘は、まさしく最愛のひとを失つた悲しみのどん底にあるのだ。だつたら、なぜ？ なぜ夫は自ら命を絶つたのか？

自殺した夫は目覚まし時計であつた。丸い文字盤のうえにふたつのベルを乗せたその体は、愛嬌ある寝室の友として、また安眠と起床の番人として、世界中で根強い人気を保つていた。これはつまり、この奇妙な町での彼の立場が強いことと同義であつた。形而の海に浮かぶこの小さな有人島は、ふたつ名に時計の島とも呼ばれるとおり、ほとんどの住人が時計で占められていたのである。その希有な例外は、ながらく一羽の鶏と一人の老人だけであつた。

目覚まし時計は愛用のステッキで石畳を突きながら、毎日決まつた時間に決まつた経路を散歩してまわつた。時間に正確なことはこの町の住人すべてに共通した美德で、これを與えない者はこの町に住む資格がないといつてよかつた。比喩ではない。時を刻むに正確なことは、彼ら全員が共通して奉じるただ一つのアイデンティティなのだ。

さて、時計が散歩するといつと奇妙に聞こえるかもしない。しかし、イデアの空には遠く届かぬこの島では、呼吸する空気の濃さのためか、注ぐ日差しの薄さのためか、物質界の表象たちといえど

も、相當に気楽な暮らしが許されていたらいいのだ。厳しく運用されるルールはさきにあげた一つのみ、それ以外は自由気まだ。目覚まし時計にとって昼間は完全なオフだったから、もてあました時間を使ひのよつに使うかは、彼にとって悩ましい問題だつた。ともかく、目覚まし時計は散歩したのである。

散歩路は港を経由していた。港には定期的に船が入つた。船乗りは計量スプーンや物差しといった度量衡の子孫たちで、時計島の住人にとっては従兄弟のようなもの、仕事の正確さに関しては彼らにもまさる優秀な海の男たちであつた。なにしろ時計たちは道端で顔を合わせるたびに相手の時刻を確認し、ずれているようなら物かげでこつそり較正するというようなズルをやつていたが、計測機器たちは概して強力な自己を保持しており、定期検査の合間に大きな誤差を抱え込むようなことは、ほとんどまつたくといっていいほどなかつた。これは彼らのすぐれた資質であつた。

だから船乗りたちがひとりの人間の娘を桟橋に降ろしたとき、誰もがなにかの間違いだらうと考えた。彼女はどこからどう見ても時計の仲間ではなかつたからである。

娘は質素なパジャマを着ていた。子供といつほど幼くはないが、大人というほど独り立ちしているようにも見えなかつた。持ち物といえば、小脇に抱えた枕だけ。目覚まし時計が通りかかつたとき、娘は石畳の上で時おり裸足を踏み換えながら、眠たそうな目であったを見まわしていた。

「こんなところで何を？」目覚まし時計は尋ねた。娘ははじめ、呼びかけられたのが自分だということに気づかず、ぼうつとあたりを見まわすだけだったのだが、目覚まし時計がちりんとベルを鳴らすに及んで、ようやく自分の注意を引こうとしている者がいることに気がついた。

わたし？ に何かご用？ 娘は答えた。目覚まし時計は困惑した。

別にご用はないのである。ただこの奇妙な客人に、ふとした興味を覚えただけだ。そんなとき不意に話しかけることをためらわないほど、時計の島は変化に乏しい土地であった。田覚まし時計は赤面した。

いや、あの、妙だなと思つて。妙？　ここは時計の島で、人間が来ることは滅多にないんだ。そうなの。旅行ですか？　いいえ。尋ね人でも？　違います。じゃ、なぜここに。さあ。

そこに警官が通りかかった。警官は日時計で、時計たちの長老格であった。彼が警官を拝命したのには理由がある。つまり、彼が厳格なること他の追随を許さぬ極端なモラリストだったからである。他の時計たちはゼンマイ切れやムーブメントの故障で時を見失うことがあったが、彼は決してそのような失態を犯さなかつた。誤差知らず。それが彼の誇らしい渾名だつた。彼の得意は、普段自分の正確さを自慢している他の時計たち、特に原子時計のような若造が、数年に一度、『日時計に』合わせるために、一秒間心臓を止めるごとだつた。だがむろんこの優越感は錯覚にすぎない。時刻が厳格に定義された現代においては、日時計はつねに系統的な誤差を含んでおり、お世辞にも正確な時計とは言いがたかつた。それより彼が決して夜直を受け入れないことを皮肉つて、住人たちは彼をして『ひる時計』、などと陰口を叩いていた。夜直はすべてもう一人の警官、ランプ時計が担当していたのだ。

話を戻そう。

通りがかった警官こと日時計は、問答する田覚まし時計と人間の娘に職業的な関心をよせた。どうしたんです？　日時計は尋ねた。気の置けない市民の友。笑つて傾げた頭のうえで、鋭い指針が宙を円く引つ搔いている。

やあどうも。こんにちは。何かお困りでも。いいえ。こちらは？　ええ、どう説明したら。いつたいまた。私はべつに。楽になさつて。ははあ？　ええと、待つてください。ちょっと。待つてください

い。困つてゐるかと言われても、ああ、あなたが。え？ 待つてください。どういう意味？ 一体誰が喋つてゐるんです？ 失ごめん礼なさい。

ホンカンは！ 本官がいつ。お困りの方をお助けするのが勤めでありますから、その要するに、お嬢さんがお困りなのではないかと。はあ。靴も履いていらつしやらない。まあ。一体どうされたんです、この男に何か。ちょちょちょと待つてくださいよ。あらそんな。私はそう、あなたと同じで、このお嬢さんが困つてゐるのではないかと。ふつむ。……。で、お困りではないんですか？ 実は少し困つてます。どういつふうに？ なんでここにいるのか、よくわからないんです。ほう。その質問は私がさつき。君は黙つていたまえ。……。いつここへ？ 気がついたときにはもう。ここにくる前は？ さあ。どちらへ行かれる？ 予定で？ わかりません。日時計は肩をすくめた。

「妙な話ですね」怪訝そうにしつぶやく田覚まし時計に、背の高い日時計は、阿呆を見るような視線をおろした。「そう妙というわけでもない、当面の行き先を知らない者はありふれているし、誰しも最初はどこでもないどこかからやって来るのだからね」警官の声はいかにも落ちついている。だが、頭上の針が值踏みするように小さな輪を描くのを娘は見逃さなかつた。次の声は娘に向けられたものだ。「事情はわかつた。ただ、ここは時計しか住めない町でね。きみが何者か、ここに定住することを希望するのか、立ち去ることを望むのか、色々はっきりさせねばならないことがある。署まで来てくれるかね。」こじり足も冷たからうじ

娘ははいと答えた。

「それじゃ田覚まし時計くん悪いが」 日時計は田覚まし時計を見下ろしながらいう。「役場に行つて、住民課のハト時計に署まで来るよう伝えさせてくれないか」「お安いご用です」

日時計は娘を導きながら、警察署に向かつて街路を渡りはじめた。一方田覚まし時計は役場へ向かつて歩きだしかけたが、はたと立ち

止まつて振り向いた。

「待つて、お嬢さん」

警官と娘も振り返った。

「？」

「これを使って。なるべく足に体重をかけないようにすれば楽でしょう。こここの街路は磨り減っているけど、デコボコがないわけじゃないからね」

目覚まし時計は娘に歩み寄ると、持っていたステッキを差し出した。娘は一瞬ぽかんとしたが、すぐに微笑んでそれを受け取った。

「ありがとう。ときどき石が痛かったの」

目覚まし時計はベルの端をつまんでお辞儀をすると、一人に背を向けて歩み去った。警官と娘も、何ごともなかつたように歩き出す。朝の空氣に、ぺたぺたという裸の足音が軽く響いた。

ステッキは娘には短かつた。

署に到着した日時計と娘が雑談などしているつむじ、連絡を受けたハト時計が息を切らせて現れた。一体どうしたつていうんです？ハト時計は訊いた。移民？ いけませんよ、人間の娘なんて。いやまだそこまでは言つていない。では何だつて私を。いやね、やっぱりその移民手続きについてなんだが。ほらいわんこつちやない。知るべきことを知つてから判断させたくてな。どつちにしろ、住ませるとこりなんてありませんよ。土地は十分にあるじゃないか。時計にはね。あの老人だって住んでいる。彼は腹時計で。まあ聞け、この娘の出現は唐突だつたのだ。それと移民と何の関係が。突然港に現れてね。誰だつて最初は唐突ですよ。わかつてゐるぢやないか。なんですつて？ この娘は『来た』のではなくて、『生まれた』のかも知らん。……。

じゃああなたの意見を聞きましょう、この娘は何なんです？ 時計さ。そうは思えませんが。この娘がこの島に現れたのは、この娘が時計以外の何ものでもないからだ。その理屈はどうでしょう。例外があるかね。さあ？ それみる。しかし、先例をすべて調べるというわけにも。ふうむ。むしろこの娘の時計としての資質を試せば、それで済むことではありませんか？ それもそうだ。ねえ、ちょっとあなた。

「わたし？」

「ほかに誰がいるというのかね、エヘン」

「ちょっと、そういう言い方はよしてください、ええとですね」「なにかテストでも受けろつて感じね」

「そういうことです。試験官はこのわたくし

「どんなテスト？」

「これから頭の中で、一分の長さを計つていただきます。わたくしがスタートといったら耳を塞いで、ちょうど一分後に一分！ と叫

んでください。誤差が一秒以内なら、まあ合格としましょうか」「ついぶん安いなテストだな。それに時計といつよりリストップウォッチのような

「やらないよりはマシでしょう。とりあえずテストをやつたという実績が欲しいんなら、こんなもんで十分ですよ。まともな時計なら、こんなテストくらい簡単でしょう」

「それは私へのあてつけかね

「え？」

「あのすいません、なんで耳を塞ぐんです？」

「あ、わたしのチクタクが聞こえてしま……ちょっと、なにするんですか」

「日時計を馬鹿にしよつて。時計は絶対時刻を正確に示すのが仕事だ。お前らのように相対時刻の中に住んでいるやつらはどうしてこう

「まま待つて下さい、気に障つたんなら謝ります」

「耳を塞ぎますね？」

「だいたい機械時計なんてのは貴様のようないい

「ムツ、なにを失礼な。あなただけはどうせ経度……」

「……！」

「……！」

「……！」

「……！」

（あの、ちょっと）

「……！」

（危ない！）

「……！」

「……！」

「……！」

パップー、パップー、パップー、パップー、パップー、パップー

「あの、テストのほうは一体

「ああん？」

「パツプー、パツプー、

「ちょっとハト時計さん、ハトさん、」

「パツプー。

「気絶しとるよ。まったく気に食わん奴だ。だいたい時計つてのはもともと」

「あたしのテストは

「正午が基準で、正午つてのはつまり南中時刻、これがわかるのは

「あの……」

「チックタック、くだらん、實に」

「怒りますよ？」

娘が少し口調を変えた。「こでようやく田時計は肩をすくめる。

「ふん、止まつていようがずれてようが時計は時計だ。いまこの役立たずを時計と呼ぶなら、あんたがそうでないなんて誰に言えるね」「いつたい何のお話です？」

「合格つてことさ。この口時計のお墨付きでな。ハトが起きたら言っておくよ」

「なんだかよくわかりませんが、ありがとう」

「勘違いするなよ。あんたが本当に時計かどうかは、われわれではなくこの町が決めることだ。住民不適格だとしたら、早晚、運命のやつが君をここから追い出すだろう。もうひとつ、ここには人間がほとんどいない。暮らすのは大変だぞ。仕事も見つける必要がある」「はあ」

「まあ、せいぜい頑張るんだな」

伝え聞くところによると、娘はそのあと腹時計のところに相談に行つたらしい。だが島唯一の人間を自負していた腹時計は、この新参者に冷淡だった。にべもなく追い払われた娘は、だが、腹時計が時計修理人の看板を掲げているのを見て、思つところあつたに違いない。彼女はそれ以上の相談相手を求めることがなく、難なく生計の

道を見いだしたからだ。娘には腹時計のような技術はなかつたが、商売はワザだけでやるものではない。

娘は港のそばに小さな部屋を借りて（びつやつて借りたのだろうね？）、入り口に小洒落た看板を出した。

『あなたのゼンマイ、巻きます』

あなたの、である。よりによつて『あなたの』。

最初の客がやつて来るまでに数日かかった。だがそれを過ぎると、噂が噂を呼んで、店はたちまち繁盛した。

ここに典型的な客の例を挙げよう。

「ゼンマイなんて誰が巻いたつて同じだろ？」「いやいや、わかつてないね、あの爺さんに乱暴に巻かれるのよりかは、よほどね」「つてもよ、巻きすぎで機構を痛めたりとか、鍵を握った手がぶれるとか、やっぱり不安じゃねえか、爺さんその辺しつかりしてるからよ」「壊れて困るようなムーブメントかい」「そりや困るさ」「わかつてねえなあ、コツチ、コツチ、永遠に同じことやつてたつて芸がねえ」「そりやあお前、さすがに言い過ぎじゃねえか」「お前それでいいのか、故障しないのがそんなに偉いか」「故障はするぞ、むしろ俺はお前より」「でもお前は壊れやすい特殊機構が自慢なんだろ」「そりゃそつや」「だつたら……」

ガチャリ。

「あら、おはよづじやこます」

「あ、ああおはよづわん」

「どうも」

店の前でがなり合つていたのはオルゴール時計と自動巻き腕時計だつた。ゼンマイに関して淡泊な感想を述べていたのが自動巻き、それに反論していたのがオルゴールだ。オルゴール時計はこの店の常連、自動巻きのほうはただの冷やかしだつたが、朝も早よから店の前にたむろなんぞしているのは、やはりこの新住人に多大な興味があるからであつた。

(可愛いじやねえか)

(おうよ、これからあの娘に一曲聴かせようかと思つてな)

(これから?)

(俺の持ち歌は4曲だ。朝八時のやつが一番爽やかなんだよ)

(あと1分か)

「開店は9時からですよ。またあとでお会いしましょ」

(あつ)

ガチャヤン。

(……)

チック、タック、チック。

(……)

ポンポロポロポンパラピンパロボロ

(やめろ恥ずかしい)

ポンポンボロピロ。

(やめろよ馬鹿)

(……)

ポンポロ。

(……泣くなよ)

(……)

ポロロンロ。

罪なき時計たちの心をこいつまで乱した娘だったが、むろん自動巻き時計のようにゼンマイを必要としない者も多いし、まだゼンマイ式であつても、この店を覗覈にしない向きが当然あつた。しかし無骨な老人の手で巻かれることに慣れた古時計たちにとって、弱く柔らかい指で巻かれるバネのたどたどしい振動は、空洞のボディに一種淫靡に響いたようである。とくに首から巻き鍵を提げた大型の時計たちは、臆面もなく日々この店に通つた。キーをそっと鍵穴に入れる瞬間が、何ともいえぬ快感なのだそうだ。そういう仕組みを持たぬ時計たちの間では、彼らのゼンマイ屋通りを破廉恥なものとし

て白い目で見る空氣があつた。が、休むことなく時を刻むことを課された彼らだ。日常の区切りに小さな楽しみを求めたとしても、誰がそれを責められよう。もっとも大型のクランク式巻き機を持参して、店の前の路上で巻いてくれと頼み込んだ塔時計のような輩には、さすがに味方する者がなかつたようだが。

ぐどくなつた。話を先に進めよう。

「」のように一躍街の有名人となつた娘だが、われらが紳士日覚まし時計、何がわれらのなのかわからないが、とにかくわれらの主人公たる日覚まし時計君は、最初の半年娘の店に現れることがなかつた。日覚まし時計はゼンマイ式だつたが、ベルを鳴らす機構とバネを共有していたために、毎朝必ず一杯まで巻き直さねば散歩もままならなかつたのである。そのために、昼間はむしろ充実した動力でもつて街を闊歩することができた。昼もひなかにゼンマイを締め直すなど、彼にとつてこれ以上無意味なことはなかつた。だが残念なことに、日覚まし時計は紳士だつたのだ。

ある日、街中でついにこの一人が出くわした。邂逅、などという素敵な言葉を使ってみたいところだが、この時点では一人の間にはまだ特別な感情はなかつた。物語の都合にあわせて事実を曲げるのは好ましくないから、ここではただ出くわしたとだけ言つておこう。娘は市場へ行く途中、日覚ましは散歩の帰りだつた。

「あら、」娘が言つた。

「日覚まし時計さん？あのときはお世話になりました」

急に呼ばれた銅製の体が、片脚を突いてくるくると回る。やがて娘に気がつくと、日覚まし時計は浮かせた脚を石畳に降ろし、回転をとめた。

「やあ、君はあのときの」

「どうも」時計の挨拶に、娘が微笑みを返す。

「ずっとその恰好なのかい？」言い忘れたが、娘はこの半年というもの、ずっとパジャマのままなのであつた。

「ええ、実は。スリッパは見つけたんですけど」

「人間むきの服なんて、ここじゃなかなか手に入らないもんない。港で船が来るのを待つて、巻き尺かマールサシにでも注文するといい。何ヶ月かかるだらうけど、彼らは人間の土地にも寄港するからね」

「いえ、この恰好でいいんです。わたし、普通の服に着替えたらい、この土地にはいられなくなるような気がして」

「ほう？ そんなもんかね？ なぜ？」

「それは、？」

不思議な話である。このときに至ってさえも、なぜ娘がこの土地に住めるのか、はつきりと知る者はまだなかつた。娘は自分の直感に頼るほかなく、直感はただちにインスピレーションを呼んで、語る言葉は意味のないお喋りへと発散していく。被服の話に始まつて、ここでの生活のこと、食べ物のこと、時計たちのこと、会話は小鳥のさえずりのように途切れることなく続いた。くしゃみの気配が彼女の前を横切るまで。

くしゅん！

「すまない、長話に付き合わせてしまつて」田覚まし時計は詫びた。
「いえ、いいん くしゅん！ いいんです、あたし、くしゅん！
あたしのお喋り、でしたから」くしゅん！

田覚まし時計はガラスを曇らせた。

「風邪をひいてしまうよ。帰つて暖かくしておいた方がいい」

「ああ、でも くしゅん！ 「市場へ、いかないと」

「ああ、そうか。じゃあ、必要なものを教えてくれたら、僕が買ってきてあげるよ。あとで港の近くを通るし、」

「え？ でも」

「そのときに届けよう。何を買えばいいのかな」心なしか、時計の秒針が力強く動いた。次のカチツを力を貯めて「コチツ、待つようにカチツ、抑えるようにコチツ、

「……人参とブロッコリーなんですけど、あるかしら」

「それは、どんな部品？」

一時間後、目覚まし時計は娘の店のドアを叩いた。娘はパジャマの上からカーディガンを羽織り、いかにも風邪引きという肩の丸め方でドアを開いた。目覚まし時計の差し出したカゴの中には、人参とブロッコリー、そして蜂蜜の瓶が入っていた。目覚まし時計は蜂蜜について、やや照れながら、露天のあるじがサービスをしてくれたのだと説明した。もちろん娘にはその嘘がすぐにわかつた。娘の目には、買い慣れぬものを求めて市場でくるくると回転する危なつかしい時計の姿が、またやつと見つけた赤緑の野菜屋の親父に、人間の食べ物についてアドバイスを求める頼りなげな姿が、意識するともなしに浮かび上がった。

「寒いでしょう、お入りになつて」

娘の指は差し出されたカゴをすり抜けて、冷たいクリスタルガラスの表面に触れた。部屋の中は暖かく、ガラスはたちまちのうちに曇つてしまつた。

モノと人間との間に愛は成立するか。もちろん、する。道具は道具と言いながら、ひとはわが身をとり巻くさまざまなモノに愛着を感じるし、じゅうぶん大事にされた道具は、その機能でもつて持ち主に応える。モノの大小、持ち主の性格、いろいろなケースがあるとはいえ、我々の経験はこの命題を、強く肯定しているといわざるを得ない。だが、それ以上の関係もありうる　　といふと、あなたは信じるだろうか？　そう、冒頭で述べたように、この一人、機械と人間でありながら、同時に純粋な『法則』が支配する天上の住人は、数ヶ月後に結婚という、時計島史上前例のない関係を結ぶに至つたのである。これは全住民を驚かせた。式は時計の街の大広場を貸し切つて（ほかに用途などないのだから、そういうこともできたのだ）、五日間にわたり盛大に執り行われた。グリースと界面活性剤が振る舞われ、この滅多にないイベントのために、腹の中の

プロジェクトを交換したものまでいたそうである。そう、めったに
ない 最初で最後の 大イベント。時計の島のお祭り騒ぎ。

そして次の二日後に、田舎まし時計は自殺した。

「もう泣くのはよして、ねえさん」葬式が済み、壊れた新郎が運び出された翌日のことだ。閉めた店を何個かの時計が訪れた。ハンカチーフを取り出したのはデジタル目覚まし、死んだ金属目覚ましの弟である。彼はなんとか娘の気を鎮めようと、優しい努力を続けていた。日時計と腕時計もいた。彼らはゼンマイを持っていなかつたから、寡婦のもとを見舞うことに対して、何のてらいを疑われる心配もなかつた。店の常連たちは娘を好いてはいたが、同時に死んだ目覚まし時計への複雑な感情が拭いきれない。時計たちはおしなべて律儀だつたから、こういうとき、自らの本分をこえた出しやばりはしないものなのだ。

娘は泣きはらしていた。当然である。状況はすべて、新婦の心を打ちのめすように作用していた。目覚まし時計は遺書をしたためていなかつた。理由は不明である。娘に知らせることなど何もない、ただ死にゆく、それが目覚ましの望みだつたということなのか。あるいは、死ぬことが目覚まし時計の本然で、いまさら何の説明も要しないということなのか。あるいは、その両方だつたのか。

目覚まし時計は部品取りのために、腹時計の爺に引き取られていた。ただし、二つの古風なベル　　目覚ましの上についていた、あの　　と、それを打つハンマーだけは、ほかの時計には使い道がなく、娘のもとに残された。女が男を裏切つたのか、あるいは男が女を裏切つたのか。寡婦が優しくベルを撫でるのを、三つの時計は複雑な気持ちで眺めるのであつた。

うち沈んだ空氣にあてられて、誰もがずっと無言だつた。もっともこの三人組、僅かに音の出る腕時計以外、もともとチクタク喋り続けるのが得意な時計たちではなかつた。と、きゅうに窓の日が陰つて、日時計の影が床の中に溶けた。日時計ははつとして、大きな

体をぶるりと震わせた。そして、言つた。

「まったく辛氣くさい。みんないかれてしまつそな。腕時計、踊れ。デジタル時計、スロットマシンでもやってみる。目覚ましの野郎はもうおらん。残つたものは残つたものでやつていくしかないのだよ、エヘン」

腕時計は頷くと、金属のバンドをくねらせ、奇妙なダンスを踊りはじめた。静かな部屋に、ちやらちやらというリズミカルな音が響きはじめた。日時計は鈍重な足もとを床から上げて、尖った先端を剣のように振り回して踊つた。見るからに危なつかしいが、止めるものは誰もない。まるで馬鹿のような振る舞いだつたが、娘の気を紛らすために、彼らにできるのはその程度だつた。

ひとりデジタル目覚ましだけが、娘に直接話しかけ、彼女の絶望を共有することで、それを直接和らげようとしていた。すでにふたりは身内だつたが、あるいは、兄に似た弟は、たんなる義弟として以上の　よそう、デジタル目覚ましの誠意をくさすのはこの物語の目的ではない。ともかく、これだけはいえる。デジタル目覚ましの優しさは、寡婦の危機的な精神状態を僅かなりとも和らげることに成功した。泣き疲れた人間の娘は、いつもどおりパジャマのままで、テーブルに突つ伏して眠りに落ちていつたのだ。打ちのめされた体は完全には弛緩しなかつたが、ともかく、極限まで追いつめられている人間は、このような開けた姿で眠りにつけるものではない。

デジタル目覚ましはそれを見届けると、なお床を鳴らして踊り続ける日時計と腕時計に、静かにするよう小声で命じた。

「二人とも、どたばたするのはやめてくれ。せつかくなえさんが眠つたんだから。でも、これでひとまず安心だ。少なくとも、あすの朝まではね。日時計さん、毛布を持ってきてくれないか。風邪を引かせちゃいけないから。僕にはちょっと重たいんだ。腕時計さん、どんな食べ物があるか見てきてくれ。明日の朝食は、ぼくらで用意しようじゃないか。ぼくらに作れるかわからぬけど」

娘の肩に毛布を掛け、蜂蜜とパンが台所にあるのを確認すると、時計たちは明かりを消して、居間の適当なところに収まつた。「おやすみ」

翌朝、もつとも早くに目を覚ましたのは日時計だった。彼は夜明けとともに活動を開始した。日頃傲岸な警察官である日時計も、眠る仲間を無理に起こして付き合わせるような無法はしない。彼は台所で湯を沸かし始めた。次に目を覚ましたのは腕時計だった。彼は戸棚から紅茶の缶を探し出し、なんとか蓋をこじ開けると、ポットに茶葉を流し込んだ。最後に起きたのはデジタル目覚ましだった。しかし彼は台所のほうには参加せず、娘の前のテーブルに鎮座して、表示パネルの数字をゆっくりと、確実に、カウントアップさせていった。デジタル目覚ましの役割は、適切な时刻に娘を起こすことだつたからである。

やがて、紅茶の香りが台所から漂い始めた。日時計がポットとパン、そして腕時計を載せた盆を運んできた。6時59分だった。彼らは『7時に』娘を起こすと予定していたのだった。彼らは時計たちであつたから、予定時間を過とうはずがなかつた。日時計が盆をテーブルに置き、腕時計がぴょいとテーブルクロスに飛びのつた。デジタル目覚ましは、予定の时刻が近づいてくるのを感じていた。そう、7時に、目覚ましの電子音が鳴るのだ。娘はどんな顔で目を覚ますだろう。暖かい食事が用意されているのを見て、少しば笑つてくれるだろうか。三つの時計は、その時がくるのを計測しながら、待つた。

6時59分50秒、51秒、

(おはよう、朝ですよ、ねえさん)

デジタル目覚ましは、すでに頭の中で第一声を決めている。

56秒、57秒、58秒 、

そのとき、娘が目を瞑つたまま、がばりと上体を起こした。三人は驚愕した。パジャマの腕が乱暴に伸びて、舞い降りる鶯のような正確さで、デジタル時計の天辺にあるスイッチ　目覚ましオフのスイッチ　を殴りつけた。ぱちん。すべては一瞬のうちに起こった。何が起こったか時計たちが理解するよりも早く、腕はぱたりと卓上に落ちて、娘は肘を伸ばしたらしない恰好のまま、まるで何ごともなかつたように、また、机の上に突つ伏した。大きく息を吸い込む音が響いて、それを吐き、今度は中くらいの勢いで長い深呼吸をおこなうと、娘はそのまま深いまどろみに落ちていった。

7時0分4秒。デジタル時計の電子音は、鳴らなかつた。

目覚まし時計と娘がなぜ惹かれあつたか、娘の時計とはなんだつたのか、もうおわかりであろう。目覚まし時計は起こすべき人を必要としていた。娘は目覚まし時計がなければ、時計としての本領を発揮できなかつた。ふたりが結ばれたのは必然であつた。そして不幸なことに、お互ひを求め合うことによつて、ふたりは別な必然をたぐり寄せてしまつたのだ。娘の存在は、目覚まし時計の目覚ましたる機能を、殺してしまうことによつて意義を得たのである。

物語はここで終わる。ただ、ひとつだけ付言しておこう。ふたりの弟であつたデジタル目覚ましは、兄が生きてゆけなくなつた理由を、ついに義姉には説明しなかつた。イデアの空に見下ろされたこの島では、それは避け得ない結果だつたからだ。そして繰り返しになるが、夫たる目覚まし時計も、妻に遺書を残していなかつた。彼女の心を守るために。どこにも罪はないのだ。だれにも罪はないのだから。

あなたの家には目覚まし時計があるだろうか。あなたの心にはこの娘が住んでいるだろうか。もし両方ともイエスなら、たまに、たまにでいいから、あなたの目覚まし時計を労つてやってほしい。また

どろみを搖するあの音は、時としてあなたの心をかき乱すだらう。
だが、あの音はあなたのために鳴るのだから。あの音がなければ、
あなたは決して安心して床に着くことはできないのだから。たとえ
毎朝あなたに拒まれようとも、日覚まし時計は律儀に、明日も、ま
た 鳴りつゝあるだらう。あなたが彼を壊してしまつまで。

(ア)

その3（後書き）

あつがとひらくやこめした。ちょっと変わったお話をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7991f/>

と・け・い

2010年10月8日15時33分発行